時事新報は一年三百六十五日一日も休刊なし

時事新報

第二千二百二十六號
明治廿二年三月十二日　火曜日
舊曆己丑二月十一日（丁亥）
日出午前五時五十八分　日入午後五時四十五分
月出午後零時四十三分　月入午前二時二十五分
滿潮午後零時三十七分
（西曆一千八百八十九年）

時事新報

教育の犧牲（昨日の續）

本論に付きエドワード、エー、フリーマン氏の意見
當世流行の試驗の弊に就ては余は余が自身に從事する學校に於て直接に知り得たる所を述べんとす余は是れまで若干年間、外に在りて近來再びオクスホルド大學に歸參したる者なれば新舊兩時の有樣を對照比較するに他人よりは大に便なるものあらんと自ら信ずるなり今日の情態を觀るに試驗を以て學校修業中の最大目的と心得、試みる者も試みらるゝ者も雙方ともに全く心を此一事にのみ傾くるよりして試驗の種類次第に增加し今は其名稱さへ付する能はずして數字もしくは文字を以て之を區別する事となり入學生は其入學試驗の前に於てすら既に幾多の試驗を經過せざる可らざるの定めにて就中、有形理學の如きは其試驗の法、日にます／＼繁雜となり隨て其費用も少なからず一人の試驗に時としては五十磅乃至六十磅を消費することもありて學生の氣風は次第に卑きに就くの趣あり抑何故に獨り有形理學にのみ重きを置くかと云ふに主教者が自から之に一種の意味を付して容易に他人の解釋を許さず所謂自分發許なるものにして例へば新規に何學を發明して之を試驗の一科目に加ふるに學校中五六の人々は又例の發明なるかとて陰に之を冷笑する者あれども誰れ一人も公然その新發明なる何學の試驗に對して不可を唱ふるものなし蓋し今の學問社會の氣風として苟くも所謂理學の神聖なる領地内に一步を犯さんとするときは直に狂愚者、學敵等の惡名を蒙るの恐あればなり斯くて校内の學問社會は無事圓滑、人々試驗の事の外、他意なきものゝ如くなれども其結果たるや唯大學の學問と授業とを金錢賣買の境界に墮落せしめたるまでの事にして學生は先づ第一に如何なる試驗を受くるを以て己れの懷中に最も利益ある可きやを研究するに至れり余は再びオクスホルドに歸りしとき「第一級の市價」と云へる詞を聞て一驚を喫したり如何となれば余が往時同校に在りし時には曾て斯る詞を耳にしたる事なければなり尤も當時の學生とても高級に望を掛けたるは無論なれども其は名譽の爲めに望みたるものにして金錢を以て級の價を量るなどは夢にだも知らざりし所なり又近來は講師業と云へる言ありこれ又驚く可き詞にして以前は絕えてなかりし所のものなり而してこの所謂講師の營業者は身は大學の敎師たるにあらずして唯學生に講義するを以て職業とするものなるが故に其敎ゆる所の科目は多々益々多きを嫌はずして其敎授方も亦甚だ粗末なるを常とす蓋し試驗の一事を以て學問上、唯一の目的となすときは試驗の度數も次第に增加し其科目も隨て繁多なる可きは勢の免れ難き所なれども抑も大學敎師の本分は學生をして正當なる書を讀ましめ且つ自ら大部の本書を手にして學生の爲めに其意義を解釋するに在りて此事たるや本來試驗云々の爲めならずして其學科を講習するに在ることなれども今日の有樣の如く單に學生の試驗を經過せしむるを以て敎師の職掌となすときは本書に就て其意義を解釋するの必要もなく敎師は唯書籍の代理を爲すに過ぎずして其弊害少なからざる中にも其頗きは殊に新設の學科に多し近世史の一科の如きは即ち其一例にして本書に就て意義を研究する事をなさず唯彼の講師の輩したる講義錄を暗誦丸呑にし以て試驗の急に應ずるを以て專一となすが故に斯る學科には眞誠の敎師は其力を用ふる所なくして彼の講師營業者をして跋扈せしむるのみ如何となれば敎師の薰陶を受くるは眞に智識を求むるが爲に外ならずして所謂一級の市價を利せんとするには其營業者より購求するを以て最も便利なりとすればなり

以上試驗流行の結果は世の學生をして書を讀むは智識を得るが爲めならずして試驗を經過するが爲め市價を博せんが爲めなりとの思想を抱かしむるものにして其弊たるや實に少なからずと雖も然れども又これを以て試驗を全廢す可しと望むは極端に趨るの嫌なきにあらず若しも現行の試驗法にして不完全なるものならんには宜しく其個條を指摘して之を改正せしむ可きのみ余は全廢論を不可として局所の改正說を執る者なり

（以下次號）

雜報

英國叢談（一昨十日の續）

時を惜む事

時是れ黄金とは古き諺にして英國の人民は最も能く此意を體し寸陰を惜みて業務に勉强すると他國人の得て企及する所に非ず是も英國々富の一源因にしてロード、ブラッシーの統計によるに英の二人は佛の三人に當り印度の廿人に相應するが故に英の勞働者は其賃銀他に比して聊か高貴なれども三百六十五日を通計して二人の三人に當り又廿人に相應するに照して起算するときは英人は寧ろ賃銀の廉なるものなり云々と予始め之を疑ひしが實地に就て其勞働の有樣を見るに及びブラッシー氏の予を欺かざるを知り却て一層の感情を惹起したり今爰に實話を以て一證を示さんに一日予はフランバラー、ヘッドの洞穴を見物せんとて友人某氏と共に汽車に乘込みしに相客の中に國民軍の兵士ありて復習點呼の爲め鎮臺へ赴きし者が事濟みて田舍の我家へ立歸るものと見受けたり斯て汽車は途すがら各所に立寄りつゝ進行する其間に或る停車場に達せしに兵士の妻子にやあらん今迄田畑の耕耘に餘念なかりし者がソレと見るより欣然として馳付け來り頻りに兵士を勞はりて子供は小荷物を背に負ひ妻は鐵砲を肩にして手を把りながら我家へこそは歸り行く、洞穴の見物に其日を送り夕方歸路に就かんとして馬車に乘込しに身裝こそ軍服ならねど車掌の男は紛ふ方なき先の兵士なり僅かの變化の奇かしさに貴樣は先刻の兵士にあらずやと問懸けしに如何にも其兵士なり吾々は一週日の間軍隊の復習の爲め鎮臺に赴くものにて復習の間こそ鬱散なれ衣食手厚く音樂も淸らかにして心地樂しく覺ゆるなり予これを聞いて感に堪へず扨々兵は國民の義務なりとて復習を懶しとせざるのみか歸り早々着物を着替へて爰に來り兼轄に車掌となりて業務に勉勵するこそ殊勝なれ若しも是が日本人ならんには兵役を忌避するは勿論物珍らしく家に歸へれば其日は雜談に時を移し仕事は何れ明日に讓るの習なるに片時も遊んで暮らすを慊しとせざる其心懸は積り／＼て國富の源因をなすものに非ずや然り汝の心懸は誠に殊勝なり少分ながら酒代に充てよとて懷中より錢若干を出して與へければ厚く謝意を表して別れけり是は此兵士一人に限るとかと思へば左にあらず全國殆んど皆かくの如くなれば數に於て富まねばならぬ道理なり蓋し只管働くを專務と心得て役々勞を吝まざるは無粹無骨にして優雅の民に非ざるが如くなれども一國民としては斯くあるこそ羨ましき限りならずやとは云へ英民樂みなきにあらず退々に之を說くべし

儉約する事

前記の如く英人は能く働く上に又能く儉約の旨を守りて濫費することなし思ふに一方に儉約にして一方に濫費する者は世に其人少なからずと雖も英人は斯る前後の不始末なる者にはあらず徹頭徹尾儉約の主義にして費やすにも自ら費やすの法あり遊ぶにも自ら遊ぶの道あり宵越しの金は手にも觸れず、快を一時に取りて死を顧みず抔のとは英人の夢想せざる所なれば時に芝居を見物せんとするに當りても食物の料理に贅澤三昧を望む者なく又日本の如く芝居の歸りには料理屋に飲食する抔の附屬費用とてはあることなし殊に田舍者の如きは芝居を見物するにも日柄を撰み廉價特發の汽車を俟て始めて倫敦に出掛くるの常なり以て儉約の一般を見るべし蓋し日本其他の實際を按ずれば一圓の內九十錢を費やして十錢を餘すときは十錢は恰も儲けものとして苦もなく無用に消費することなれども英人は十錢を見ると殘餘の十錢ならずして一萬圓中の十錢なりと目するが故に容易に看過すること能はざるに至るも自然なるべし即ち十錢を殘すときは直ちに銀行に貯蓄して一萬圓中の十錢に算入するは亦國富の一源因ならずや是れ併しながら貯蓄の便によることにまて一國の習慣と相待て此美をなすものゝ如し

（未完）

○清國通信　上海二月廿二日發

海賊と筆談　先頃或日本人が和服のまゝ甘肅の山中を通行して山賊に出逢ひ用意の短銃を以て難なく打伏せたることありしが此程又一人の日本人あり陝西に於て河船を雇ひ流を下る折しも何所よりか來りけん十數人の海賊突然船に乘移り此日本人を取圍みて强談に及びしが此者少しも動ぜず悠々と腰の墨斗を取出し賊と筆談に及びしところ流石の賊も遂に納得したりと見え一物も奪はずして立去りたるよし

鎮江の近況　去る十八日漢口より鎮江に至りたる或一人の話に去る五日の騷ぎ後は長江一帶の河港、さしもに繁昌なる貿易場も居留地民家おしなべて茫々たる燒野原となり亂後の慘狀見るさへいとゞ痛ましゝと云ふ又此頃より居留地に在る支那巡査一人に付外勇兵二人宛附添ひ嚴重警備をなし居るよし

中外官の談判　鎮江は先づ事治まりたれども其後の談判は如何に成行くべきや孰れも注目する所なるが此程南洋大臣曾國筌は徐建寅、沈仲禮等の諸氏を委員として鎮江へ派し揚州兩觀察を始め各國領事官と共に會議

を開きたるも
者は損害要償
あれば議着着
龍旗の職　去
所の各組合よ
組合は全く消
り寄附の資金
大變よ飽迄
欒を荷ふは却
さらばとて
電信　九江よ
の成功を見る
假粧會　昨年
して一時評判
二十五日頃佛
事館内にも右
の價は五弗に
られ迷惑せる
齒科醫　長崎
りたるが一兩
合なり當地に
ば需用多きと
伊東祐彪氏
理領事を命せ
し赴任したる
月初め該地を
○合衆國内に
は開化の度を
て減少の憂ひ
富饒の國だけ
國よ人口の增
生活する人口
ども合衆國百
百年前には全
もの殆んど十
べきものゝ數
百萬あれば都
八百八十年の
の數は二百七
數を有するは
百三十一箇所
箇所なり千八
とし人口最も
千八百八十四
查したる所に
百萬人の概數
○伊國職工の
よて無職業勞
同國政府にては
には起らず又
無職業者市中
涙出して漸く
から丁各商店
後衛は來襲の
政府にては鎮
るも止まず兵
めに傷を負ふ
りとの風說な